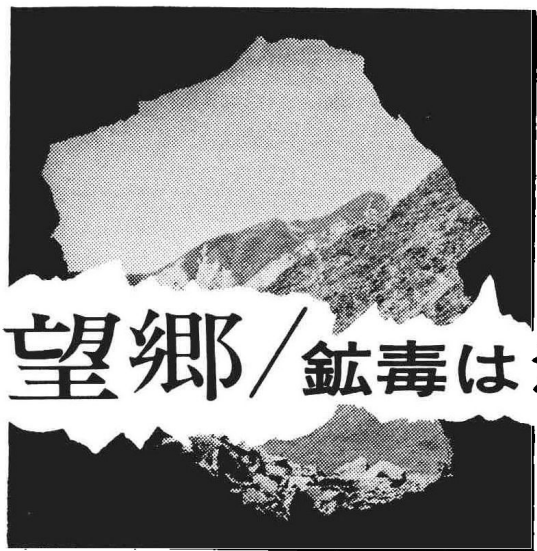




望郷／鉾毒は消えず

林えいだい

亜紀書房

著 者 略 歴

1933年 福岡県生れ

早稲田大学中退

北九州市教育委員会勤務

現在 報道写真家

現住所 福岡県田川郡香春町採銅所2615番地

著書

「これが公害だ」(写真集, 北九州市青年会議所)

「公害と教育」(共著, 明治図書)

「八幡の公害」(朝日新聞社)

1972年4月20日 第1版第1刷発行

定 価 850円

郷望 鉾毒は消えず

著 者 林 え い だ い

発行所 株式
会社 亜 紀 書 房

東京都千代田区神田神保町1-51

電 話 03-294-0087(代)

振 替 (東 京) 144037

<検印廃止>

乱丁本, 落丁本はおとりかえいたします。

印刷・文昇堂 @35

序

公害は超現実的である。しかもその苦しみは、被害者にとっては日常の生活の中にあり、そこからのがれることができない。

公害に身をもってかかわろうとした人の言動が、しばしば奇異の念をもって受け取られた時こそ、実は最も深く未来を見通していた実例は、昔からたくさんある。

豊かな庄屋の家に生れ、栃木県会議長から衆議院議員として、改進黨内に重い地位を占めていた田中正造が、衆議院壇上から「亡国を知らざるものこれすなわち亡国也」と叫んだとき、世人の多くはこれを狂人の言と受け取った。七〇年後、現代のわれわれはこの言葉の的中を身を以て経験している。

本書の筆者、林えいだい氏が、たしかに居心地はあまりよくないとはいえ、安定した北九州市の職員の座をけて、浪々の身となったときいた時、私は自分のめざすものが彼に遠く及ばないことを知った。かつて田中正造が議員の席を辞し、世人の想像を絶した直訴の行為をえらんだことを思い浮かべた。私もまた彼に北九州の拠点にこもって持久戦をすすめた一人であった。

彼は田中正造とは異なった時代に生きる人であり、異なった道があることを知っていた。ペンとカメラをもって、ごくふつうの市民の心に直訴する道をえらび、そしてしばらく私たちの眼から消えた。時々私たちの仲間は、逢うたびに彼の安否を気づかったものである。

直訴のあとの田中正造と同じように、その間、彼は足尾の鉍毒地に出没し、被害者の中に身をおいて、日本の公害と、その上にそびえ立つ日本国を見つめる作業をつづけていた。寢袋をかついでは遠く北海道の栃木部落に谷中村の遺民を追ひ、生命の危険をおかして足尾の岩壁にとりつき、追いつめられて不覚を恥じるような体験を重ね、当時の農民の苦しみと絶望を体験で追うために一昼夜かけて雲龍寺から日比谷まで歩いてみるほど足尾鉍毒事件に没入した。

当世風にすべてを文字から見て、頭でおぼえようとする人から見れば、馬鹿らしく泥くさい方法であろう。しかし私は自分の体験からも、この方法によってしか公害の現実はとらえられぬことをよく知っている。林氏がこの本を書くにあたって、新聞記事の引用を全くせず、すべて聞きとりという最も直接的な方法と、自分の体験だけに頼ったことの重味には、私の仕事などとはとても追いつけない。これだけの作業なしに公害を論ずるおしゃべりが、政府や企業だけでなく民衆の側に立つと自称する人々の中でも幅をきかせているからこそ、いつまでたっても公害の本当の姿が見えてこない。まして本を読んで勉強しようとするほど、わけがわからなくなるのである。

足尾は終わった、過去の事件だ、と私たちが長い間信じこまされていたのも、こういうおしゃべりのおかげだった。この本にはつきり書かれているように、公害には終りはないのである。それどころか、次から次へと積み重なって、ついには自然の一部となってしまう。銅、鉍泥、ヒ素、カドミウムと、次々に問題が表に出るが、水田にたまった鉍毒は取りのぞきようがなく、そこに生きる人間も、今さら騒いでも損をするばかりと、自分で自分をしばる毒された思

考の中へ落ちこんでしまふ。これこそ田中正造の叫んだ亡国のさまではなからうか。

実際には、足尾の悲惨な敗北の教訓は、その後戦前の公害紛争では被害者ばかりでなく、加害者によってさえ生かされたものであった。戦後そうした経験のつみ重ねを忘れたからこそ、私たちが今このひどい公害のもとで出口なしに苦しまねばならぬといつてもよい。ようやく最近になって、足尾以来の日本の公害が歩んだあとを見直そうという空気になって来たのであった。

この時にあたって、林氏が足尾はまだ終っていないことを、身体でたしかめて報告したこの本が出版される意味は大きい。しかもその体験を通じて、安定した生活が所詮幻影でしかなく、生活をなげうってでも公害に肉迫しなければならぬと考える人間がまた一人ふえたことは、これからの公害を食いとめる活動にとって力強い前進である。思えば一〇年前、水俣病を追ってひとりぼっちでもがいていたころにくらべて、本物の同志もまた着実に増えて来たことは、たしかに私を力づけてくれる。これから一〇年後、公害もおそらく激化するにはちがいないが、それに敢然立ちむかう人間の群れもまた厚い層となって、日本の転換の潮を用意できるのではないかと、心強く思うことが私を明日の仕事へかり立てる原動力となる。五年後、一〇年後がたのしみな本がまた一つできた。そのころには、林氏のような身体できざまつけた理論が、私たちの行動をあやまたず支えてくれるだろう。

一九七二年三月一〇日

目次

序 (宇井純)

I 北の果てに追われて……………3

墳墓の地を後に 3

復権への闘い 12

故郷をしのんで 20

お天道さまあんなのか 27

開拓の苦しみ 34

借金のために働く 42

II 故郷へ帰りたい……………57

佐呂間町字「栃木」 57

過疎化のあらし 64

第四回請願 74

帰るところはあるのか 79

いつ帰れるか 89
谷中村を返せ 95

III 失われた自然と人間……………103

私にとっての足尾 103

呪われた町 114

流浪の果てに 121

“よろけ”になっても怒らない 130

いぶし出された住民 140

異郷の地で 149

企業べったりの労組 154

つくり出された廃墟 160

繁栄のかげに鉱毒 170

陸の孤島からの脱出 179

IV 鉱毒根絶の願い……………187

鉱毒を喰いものにした指導者 187

源五郎沢の決壊 194

被害住民の組織化はかる	205
ふたたび「押し出し」はじまる	211
問題はニゴリだ	218
農民の味方は誰か	225
ペテンで決った水質基準	232

V 渡良瀬川はもとに戻らず

今なお鉱毒が	239
火を吹いた反対運動	248
原因はわからない	257
ppm予算	265
怨みの足尾銅山	271
足尾銅山東京出張所	281
ほんとの敵はどこなのか	288
めざすは東京	298

補章 帰り着く地はあるか

望

郷

鉋毒は消えず

I 北の果てに追われて

墳墓の地を後に

春のおとずれとともに、赤城山から吹き下すからっ風はいつしか止み、自然が息吹きはじめの四月。「栃木県北海道移住団」と書いた三メートルのノボリを先頭に、東北本線小山駅をめざして重い足どりで進んで行く一団があった。

この人たちは、谷中村民一七世帯をはじめとする鉾毒被害民、一町六ヶ村、六六世帯、総勢二一〇人で、荷車には持ちうるだけの全財産が積み込まれていた。年老いた両親や、子どもを親族に預けてくる者、血をわけた親子兄弟の別離の悲しみは、家を出て沿道から小山駅まで続いた。

当時の模様を下野新聞は次のように伝えている。

「下都賀郡南部一町六ヶ村の水害地窮民は、今朝小山駅を発して北海道移住の途に就かんとす。住み馴れし墳墓の地を去り、親しき郷党に離れて一念起生、茲に窮余の活路を辿らんとする一行の心情を察すれば誰れか惘然たらざる者ぞ。別離悲愴の感は素より人情の自然にし

て時の古今人の老若を問わざるもの。されど吾輩は這個（しゃこ）一行を送るに当りて此感特に深きものと共に、斯かる悲愴の感を呼起さしむる別個の事情に想倒せざる能ざるなり……」

北海道開拓の歴史はまだ浅く、北海の果てに行く不安と期待は移住する人々の心の中に渦巻いていた。「一〇年したら帰る」という、あわい期待を胸に特別列車に乗り込んだ。

県からは、第一回入植者の「水害移住事務取扱」を命ぜられた下都賀郡書記大貫権一郎氏（昭和四年足利市助役で退職）と、赤十字の看護婦が二人派遣された。

小山駅を出発したのが、明治四四年四月七日であった。四月九日に青森に着いたが、現在ののような連絡船はなく、会下山丸という貨物船であった。

ハシケで沖の貨物船まで行き、梯子を伝って乗り込んだのも束の間、船火事が起った。たちまち煙が船内に蔓延して、老人や子どもが多いので大混乱となり、火が付いた荷物をあわてて海に投げ込んだり、バケツで海水をかけて火を消そうとした。

生命の次に大事にしていた衣類や、家財道具を失くした人たちは、がっくりして立つ元氣さえなくしてしまった。故郷を離れて三日目にして第一の災難にあって、不吉な予感が船内にみなぎり「もう帰りたい」といって泣き出す者も出る始末だった。

その時からすでに、行く先々に不安はつのるばかりで、「鉅毒さえなければこんな苦しみはないものを」と遠く足尾銅山に向って怨みのことばを投げつけた。結局、原因がわからないまま函館で下船した。煙に巻き込まれて窒息しそうになった者は、函館に着くと同時に病院に運



下都賀郡谷中村第三尋常小学校の児童たち

ばれて治療を受けた。

函館からは他にもう一つ移住団が乗っていたが、札幌で下りてしまったので列車の中は栃木団体だけになってしまった。

当時の北海道は、道北より道南のほうが早く開け鉄道の便はよかった。しかし移住予定地の佐呂間に行くには、北見で下車しなければならなかった。

春がまさにはじまろうとした時、故郷を出発したので、誰一人として北海道のきびしい寒さを知らなかった。暖くなるだろうからと裕せの袖の長い着物を着て、白足袋一枚、男は下駄か草履という姿で留辺しべ峠を越えた。

留辺しべ峠は、今では曲り道になって傾斜がゆるやかであるが、昔は沢を伝って直接下りたため、道幅は狭く、一步踏みはずすと生命取りになるほど危険な場所であった。当

時、青木農場があつた若狭に着いたところが、先に入植していた岐阜団体の人たちは、やってきた栃木団体の姿を見て「この人たちは本気で開拓するのだろうか。寒い原生林で今からどうしてやっていくのだろうか」と一様に驚いたという。

こうして、小山駅を出て一五日目に熊笹と原生林の北海道トウフツ郡サロマベツ原野に入植の第一歩を踏んだ。この日が明治四四年四月二一日であつた。

検地と入植の割り当てが終ると、仮小屋を建てて住んだ。

雨風をしのぐだけの応急処置の仮小屋であるので、三角屋根に、生の松葉を逆さにたらし、戸のかわりに入口にはムシロをかけた。ワラやナワは大切にとって使わずコクアや野ブドウのツルを柱にしぱりつけた。

六六戸の家族を収容するため小屋を五棟建てたが、一棟に一二、三戸平均入り、わずか畳二枚ぐらいのところに家族住んだわけだから、家族数の多いところははみ出してしまった。

佐瀬ハルさん（七八歳）は、当時、まだ一八歳だった。「ほんとに大変でしたよ。あの時の寒さと冷たさは一生忘れられません。小屋といつてもかこいが悪いから風や雪が吹き込み、熊が出るというので、狭い小屋の中で生木をたいて煙を出したので、まるで狸の煙攻めと同じで、煙と暗さでどこに人がいるかわからずとび出しましたよ。まさかあんなひどい生活をするとは思ひもよらなかった」と想い出を語る。

北海道の風土と気象条件がわからなかった栃木の人たちは最初からとまどいし通しで、着物も長い袖のあるものを着ていたので、雪どけなどで濡れ、着物の裾はいつもびっしょりだった。

また、狭い小屋の中で火にあたるため、たき火がとび散り、着物の裾をこがして穴をあけたのを、ボロボロになるまで着た。数多く穴のあいた着物は、縫い返しなどはできなかった。

栃木団体二一〇人を待ち受けていたものは、きびしい北海の寒さとサロマベツの原生林だけであった。

続いて、大正二年には、ふたたび第二次栃木団体三〇戸が佐呂間町字栃木に入植したが、入植して間もなく、栃木地区には駐在所がおかれた。それが昭和初年まで続いていたことは、栃木団体の移住の性格を考える上で重要な要素をもっている。

では、北海道移住の強行は、どのようにしてすすめられたのだろうか。

明治四三年八月七日からの渡良瀬川の大洪水による利根川の逆流は、農作物に大被害を与え、収入は閉ざされ、農民は決定的な打撃を受けた。生活は深刻になり、谷中村廃村問題とからんで社会不安が増したため、内相平田東助は現地視察した後、一〇月に臨時治水調査会を設け、そこで北海道移住の計画が秘かに進められた。

北海道移住について田中正造は、ほとんどふれてないが、木下尚江編『田中正造の生涯』の中で、

「下野の谷中の地は肥沃なり。一反にて粃一二俵を得る所ありき。此土地を耕す人民を逐出して洪水の宿泊所となし、人民をば北海へ移すことをつとむ。北海を開いて中国を亡ぼす。朝鮮を得るも、日本本島を失はば如何。北海開けんも、中国を失はば得失如何」とある。



鉈毒被害地を調査する田中正造

県は、谷中村民を三八年一〇月頃から、那須郡や塩谷郡の開拓地に移転させていたが、開墾地や、開墾に要する農具、肥料、苗種、食糧は一年間無料としたはじめての約束は履行していなかった。こうした移住の先例もあり、田中正造は、北海道移住も同じように政府と県の奸策だと見破っていた。

もう一点は、谷中を離れて北海道へ移住することは、谷中村復権の望みが絶たれることであり、谷

中村遊水池案の不当性を訴えることができなくなると考えていた。その意味から、北海道移住についてはあまり積極的ではなかった。

しかし、その時、部屋村長瀬下六右衛門、谷中村長茂呂近助をはじめとする鉈毒反対運動の指導者たちが、卒先して北海道移住団に加わったことはどうしても理解できない。今泉米次郎さん（六五歳）は、「父が元氣の時、一〇年したら帰るんだ。一〇年したら渡良瀬川の洪水はなくなっているだろう。鉈毒で苦しむことはないだろうといっていましたからねえ。ところがです